



文献紹介 グリーンフィールド『〈選択〉の神話』

概要

本書は「選択」に関する書籍である。私たちはどこに住むか、何を食べるか、誰と婚姻関係を結ぶか、といった事柄について日々選択している。著者によれば、私たちは選択について以下のようなことを前提にしている。①私たちは様々な事柄を自由に選択することができる、②自由な選択はそれ自体でよいものである、③自由に行われた選択には自己責任があり、政府や法が補償する必要はない。著者はこれらの考えには疑問の余地があると指摘し、人々によりよい選択をもたらす方法について論じている。

プロジェクトとの関係

本書によれば、あまりに多すぎる選択肢や無意味な選択肢は人々の有益な選択を困難にする可能性がある。また、私たちの選択は脳や文化、権力などに深く影響を受けており、それらが私たちにとって最善の選択を妨げるときがある。

意思決定をよりよいものにするための方法として、本書では私たちの選択が脳や文化などの影響を受けていることに自覚的であることを挙げている。そして自己責任という考え方を捉え直し、当人の選択の帰結を当人のみに負わせるのではなく、周囲に対する責任を果たすという意味で捉え、分別ある行動を促すべきだと主張される。

キーワード：選択、自由、自己責任

ケント・グリーンフィールド『〈選択の神話〉——自由の国アメリカの不自由』、高橋洋訳（紀伊國屋書店、2012年）。原書は Kent Greenfield, *The Myth of Choice: Personal Responsibility in a World Limits* (New Haven: Yale University Press, 2011)。

第1部 選択は重要だ

第1部では人々がどれほど選択を重要視しているかが示される。アメリカではファストフード店やケーブルテレビ、スーパーマーケットで多様な選択肢が提供され、選択肢が多いほどより大きな幸福を実現できると考えられている。

しかし、選択肢の提供には幾つかの問題が伴う。まず多様な選択肢を提供するにはコストがかかり、また選択肢の中には不要なものも多く、

どれを選択しても無意味な場合がある。加えてあまりにも多くの選択肢は人を圧倒し、よりよい選択を阻害してしまう場合もある。

また、ファストフードやテレビチャンネルの契約だけでなく、政治や法においても選択は重要視される。民主主義的な政体は人々の自由な同意に基づいており、契約が法的な正当性を持つのはそれが自由な選択に基づくからだと考えられている。あるいは、互いの同意に基づかな

い性交は法によって罰される。このように、選択は様々な局面に現れ、人々にその責任を課す。

第2部 選択は不自由だ

第2部では脳、文化、権力、自由市場が私たちの選択に与える影響を考え、私たちは自ら考えるよりこれらによって選択を制限されていることが示される。

第3章では脳科学と選択の関係が取り上げられる。歩くなどの基本的な行動は脳基底核によってほとんど自動的に実行されるのに対し、思考や分析、欲求の自制などは前頭前皮質が行うが、ストレスや疲労などの負担は脳を過負荷状態にし、しばしば判断を不合理なものにする。加えて、適切な判断を下すためには情動も適切に機能している必要がある。例えば魅力的な女性の画像やケーキの甘い匂いから私たちは欲求を惹起されるが、その欲求を解消する対象は必ずしも受けた刺激に関係している必要はない。このためビールのプロモーションにはしばしばビキニ姿の美女が起用される。

文化もまた私たちの選択に影響を与える（第4章）。文化的な規範は私たちに何が可能かを決定する。2009年にスーダンの首都でズボン履いていた女性14人が「みだらな服装をした」として逮捕された。このように文化は何が適切な振る舞いかを規則として規定する。

加えて文化は、私たちがそもそも何を望むか、何を可能な選択肢とみなすかにも影響する。50年前の女性に、フットボール選手になりたいか、大統領になりたいか、と聞けば「ノー」と答えただろう。このような選択肢は人々からあらかじめ取り除かれている。

著者は文化が選択に及ぼす影響を見極めることの難しさを指摘した上で、典型的な文化的影響を挙げ、少なくともそれらの影響を考慮するよう促す。著者は典型的な例として愛国主義、

消費宗教、男女の役割やセクシュアリティを挙げている。

第5章では権力について論じる。ミルグラムによる、科学実験のために被験者に電撃を流すよう命じる実験を挙げ、権力は人々の選択に大きな影響を与えると指摘する。一方で権威に従うことは常に悪い結果をもたらすわけではなく、大人が子供を権威によって従わせる場合などは有益であると語る。だが、どういった場合に権力に従うべきかどうかを見極めるのは容易ではなく、また従うべきではないと判断した場合であっても、権力に抗うのは極めて困難である。

自由市場は一般的に消費者に自由な選択肢を提供すると考えられているが、そうした自由を享受できるのは十分な資源を持つものに限られる。また市場における価格は他者に依存するという点で自由な選択から乖離している。さらに、自由市場においては臓器や性的サービスなどあらゆるものが売買の対象になりうるが、どのようなものを売買の対象にするかというのは市場の内部から決定することができないという点も、自由な選択を侵害する（第7章）。

このように、人々の選択は様々な影響を受けており、自由かつ合理的に物事を選択できるという私たちの考えは必ずしも正しいとは言えない。

第3部 よりよい選択のために

第3部ではこれまでの議論を受け、選択と責任の関係と人々がよりよい選択を行うには何が必要かが論じられる。

第7章では選択と自己責任の関係が論じられる。著者は、バイクに乗る際にヘルメットを着用しないという例をもとに、自己責任という考えを二通りの仕方で分類できると主張する。一方ではヘルメットを着用しないことで死亡しても、そのことは自ら選択した結果であり、選択した本人が甘んじて受ける必要がある。他方、

事故によって死亡すると、それは通行人や家族、職場にそのコストを払わせることになる。この場合自己責任を果たすというのは、分別を持って選択を行うということである。

今日、公共政策を論じる際に支配的なのは前者の意味での自己責任だが、自己責任の意味を後者の仕方で捉えることで、自己責任という考えの下で支持される政策も変わるとというのが著者の主張である。このことからシートベルトの着用や保険への加入を義務付ける政策は必ずしも自己責任という考えと相反するものではないという。むしろ、前者のような捉え方は自己責

任を各人の選択のコストを個人に押し付けるというレトリックとして機能している。

また、より分別のある仕方で行為するよう人々に促すリバタリアン・パターナリズムの政策も自己責任の考えから支持される。

コメント

本書が発売されたのは 10 年以上前のことだが、各人の選択に大きな責任を負わせるという風潮はむしろ強まっているように思う。選択や自己責任の概念を新たな仕方で捉え直すという本書の試みは、いまだ日本を含めた多くの社会に有効だろう。

立場貴文

京都大学大学院文学研究科・研究員

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。

ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。